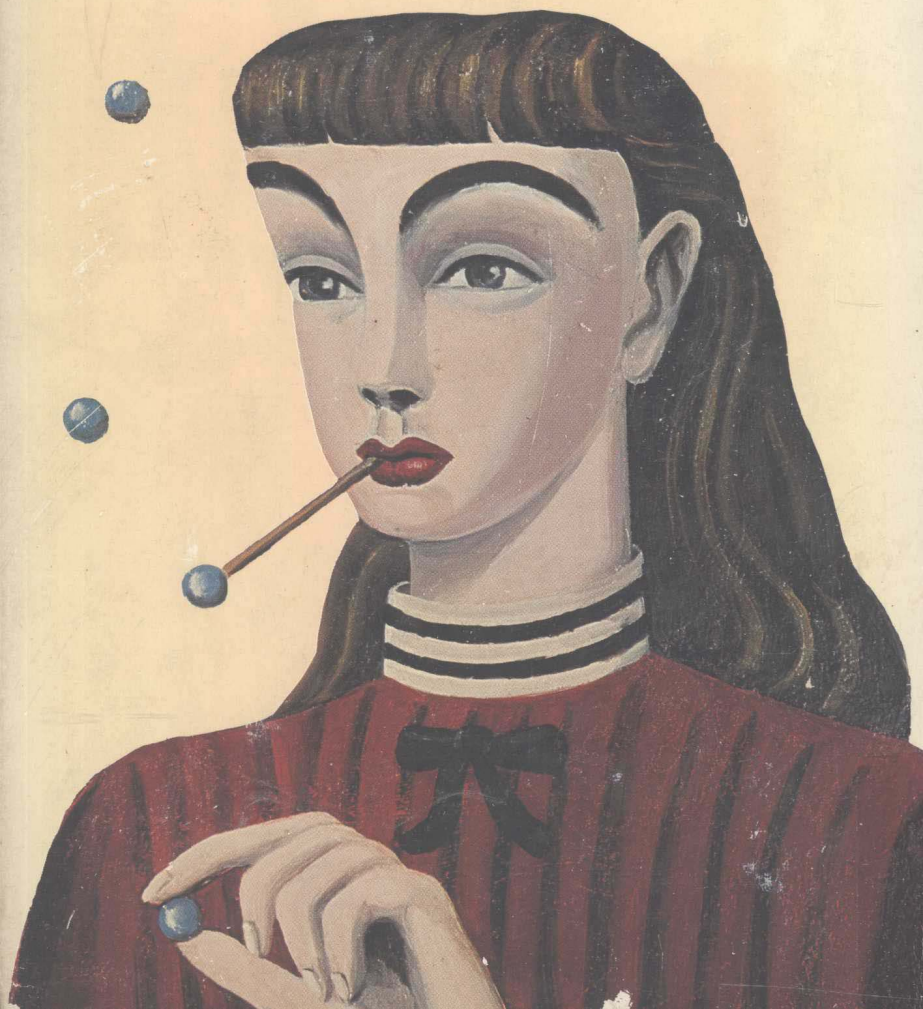


雲のいる空

吉行理恵



角川書店



吉行理恵
雲のいる空
角川書店

雲のいる空



昭和52年 4 月 30 日 初版発行

著 者 吉行理恵

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 かどかわしよてん 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 郵便番号 102
電話 (東京) (265)7111〈大代表〉 振替 東京3-195208

暁印刷・宮田製本

©Printed in Japan

0095-883064-0946(0)

目次

I

部屋の中に住んでいる月

萩原朔太郎にあずけた猫

猫たち

ミイ子

ロミ

雲

雲について

白い雲

トンガの悩み

危ない散歩

童話の中の猫

よその猫

ライオンの皺

九 〇 元 三 五 七 元 三 五 四 哭 哭 哭 三

黒豹の緑色の眼

私と猫のこと

シルベール・ガヌ『わが愛する猫の記』

Ⅱ

旅について

短い旅

ディズニールランドで

黄色いマーガレット

マドリッドへの四十時間

本と旅

夢をみにゆく

Ⅲ

海の薔薇

五

六

六

七

七

八

八

九

九

一〇

一〇

かしこそうな空

齒医者のこと

坂

詩を書くこと

贈り物について

土筆

風

ある日曜日の朝

ウクライナ

体操

公園に漂っている夢

母の庭

さわやかな母親

ちょっとだけ好きな人

月見草

二〇

二二

二六

二三

二三

二五

二九

三三

三四

三六

四四

四七

五〇

五五

五九

Ⅳ

子ども服

注文の多い料理店のことなど

真紅だけの絵

蔵の中の人

ジャガイモと白菜と桑の実

天照大御神

大きな樹の思い出

おつり五円のシコロ

叔母の家

風

立原道造について

花と大きな岩

私の二十歳

一六

一四

一六

一七

一七

一八

一八

一九

一九

二〇

二〇

二〇

二三

わが兄・吉行淳之介

「男嫌い」で通らぬ世間

掘る

あとがき

初出誌一覧

三六

三六

三九

三四

二五

I

部屋の中に住んでいる月

金色に近い黄色い眼の、雑種の、兄妹きょうだいの仔猫を二匹もらって来ました。書きものな
どとしていて、ふと視線を感じ、顔を上げると、高い場所や暗い場所から、月のような
眼が私を眺めていることがあります。

ローマ神話の月の女神ダイアナは猫の姿になって恐ろしい敵から、その身を隠した
ことがありました。

クレーは、青い散乱光の中を、小さな車輪をころがしながら、旅して行くダイアナ
を描いています。また何枚かの絵の中のどこかしらに、まるい月や三日月を描いてい
ます。

最近、私が自慢できることといったら、私の部屋の中に住んでいる月がクレーの絵
の中の月に匹敵できるということです。

萩原朔太郎にあずけた猫

私が「萩原朔太郎」という名前を意識したのは、立原道造の散文物語「かるやかな翼ある風の歌」の

ノヴァリスも風となれ

ヘルデルリンも風となれ

萩原朔太郎も風となれ

という一節を読んだときでした。萩原朔太郎という詩人の詩を読んで見たいと思いました。

私ははじめての音楽会で音楽を聴いている娘のように眼をかがやかせながら、朔太

郎の詩を読みました。

おるがんをお弾ひきなさい 女のひとよ

あなたは黒い着物をきて

おるがんの前に坐りなさい

あなたの指はおるがんを這ふのです

かるく やさしく しめやかに 雪のふつてゐる音のやうに

おるがんをお弾きなさい 女のひとよ。

詩集『青猫』のなかの「黒い風琴」のはじめの一聯を書き写してみました。

「黒い風琴」は、「情緒の音楽的形象ということや、言葉を楽譜に組みかえるということなど、この詩はその音楽的構成において、他にほとんど類をみないすぐれた作品である」（日本の詩歌）と伊藤信吉氏は語っておられます。

音痴な私にも、朔太郎の詩から、音楽は伝わってきました。

また、第一詩集『月に吠える』の田中恭吉の插画は、私を戦慄させました。朔太郎は「自分の求めてゐる心境の世界の一部分を、田中氏の芸術によつて一層はつきりと凝視することが出来たのである」（故田中恭吉氏の芸術について）と認めています。それは『異常な性欲のなやみ』と『死に面接する恐怖』との感傷的交錯」（故田中恭吉氏の芸術について）でした。

*

朔太郎の作品とめぐり会ったことは、私にとってまたとない喜びでした。私は常に自己否定を道連れにしていますけれど、当時はまとめて自己嫌悪におちいり、それが重たくてしかたがなかったのです。そんな私の存在も朔太郎の作品の前では小さな存在にすぎなかったから、胸を撫でおろしました。

ところが、私に欠けていた（今でも欠けていますのですけれど）ものといったら、論理的なものの考え方ができにくいことだったので「あっ」という間に道に迷ってしまいました。

音楽の天才、朔太郎の詩を、生まれつきの音痴の私が真似することはできませんで

した。「詩とは『詩的精神』が『詩の表現』を取つたものである」(詩の原理) この言葉をかみしめながら、以前につくつた自分の詩二篇だけを残して、ただ言葉の羅列にすぎない、においのない似非詩はすべて破り捨てました。

詩論『詩の原理』一冊を手もとに残して、朔太郎の詩集はすべて、手の届かない場所に隠してしまいました。

「朔太郎には氣をつけた方がいい」という声が私のどこかでしていたせいか、あのいまわしい半年間を終えてから今まで、私は、詩を書いている時に朔太郎の詩に惑わされたことはありませんでした。

しかし、手もとに残しておいた『詩の原理』は、詩と取り組んでいる私を、甘やかすことなく、導いてくれました。

*

私が、どうしても語らないではいられない、薬子^{くすりこ}という名前の雑種の猫のエピソードがあります。

薬子は私が詩に憑かれたころ、選んで私のところへやってきて、私と無二の親友に

なりました。

薬子は若かった頃は、たびたび家出をして、ぼろぼろの姿で私のところへ帰ってきましたけれど、晩年は、私に従いたよることにして憂鬱そうに窓辺でぼんやりと外を眺めて過ごしていました。女だてらに大喧嘩をしたため鼻はつぶされ、片目になっていました。

私の三冊目の詩集ができ上がったころ、薬子は、ふいに、いなくなっていました。た。

私は夢のなかで薬子を探していて、和服の朔太郎とすれちがいました。私はおもいつめた表情でしたけれど、朔太郎はちらっと眼の縁に私の存在を意識したにすぎませんでした。マンドリンを抱えた朔太郎ではなく、美しい妹さんと一緒に朔太郎ではなく、死相を感じさせて、私を驚かせた晩年の写真の中の朔太郎でした。その足もとで、私の大切な大きな猫は笑っていました。

以前に、夢のなかの私は、「出発」することにして、船に薬子と乗りました。ところが、薬子は船窓から飛んで行ってしまいそうにしました。薬子を置いて出発するこ